

●瓦の時代分類

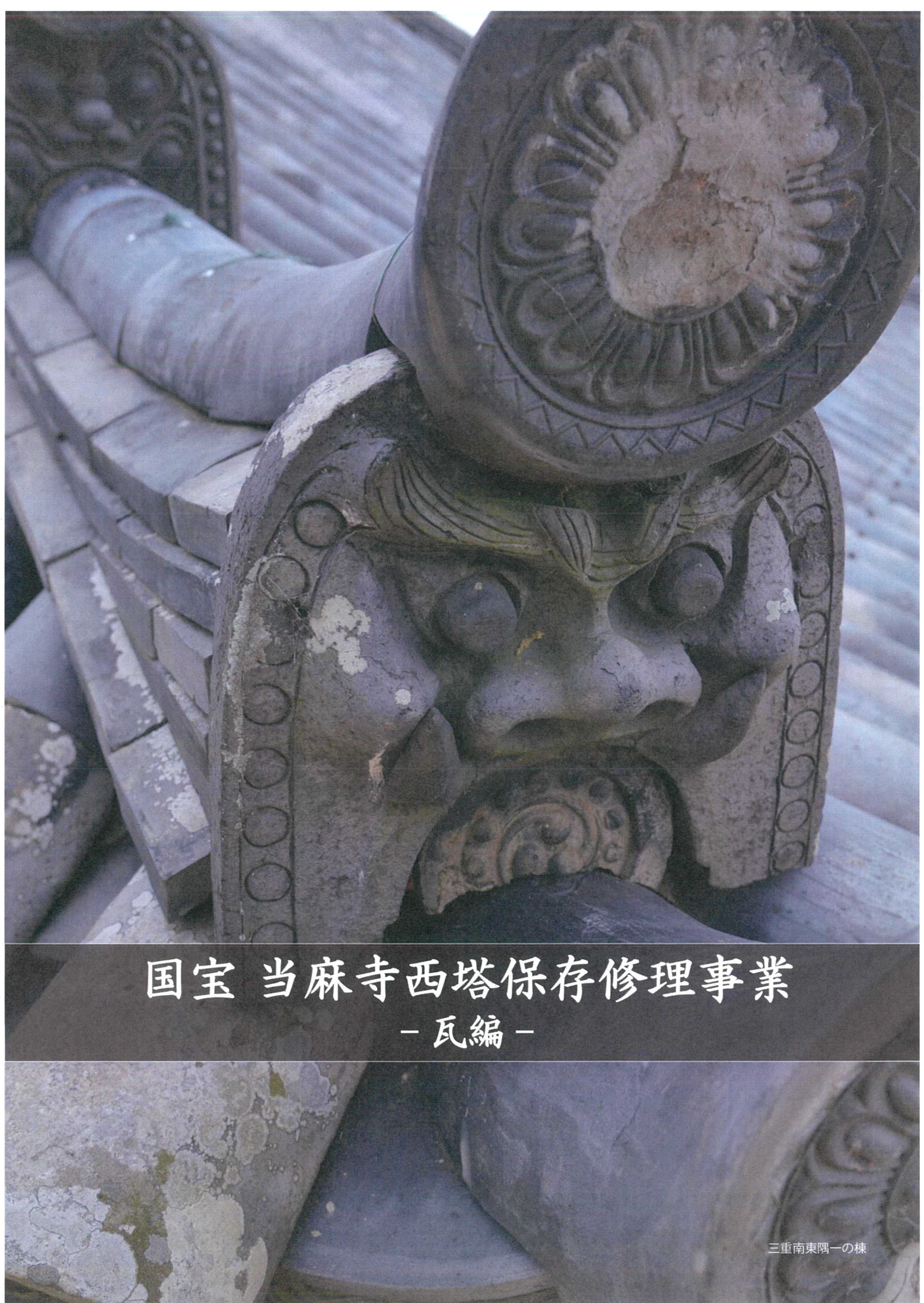
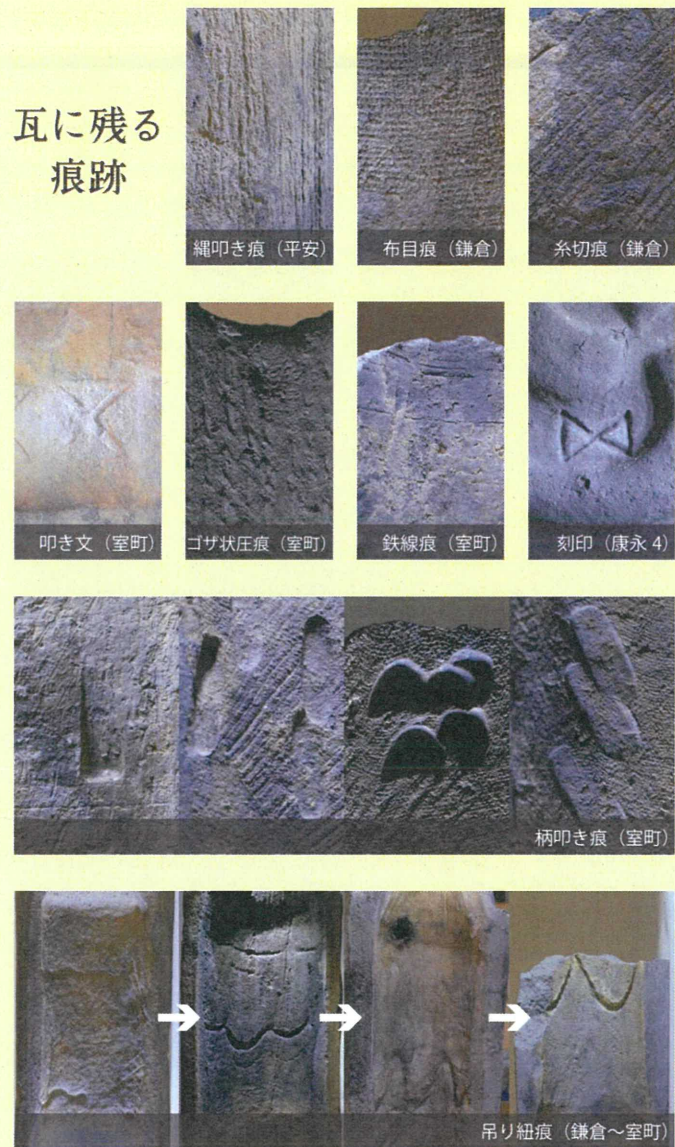
一般に古代の瓦は、軒平瓦は厚くて重く、瓦当文様は蓮花、唐草などがあり、平安後期になると巴文が出てきます。中世の瓦は大型で厚みがあり焼きもよく丈夫で、叩くと澄んだ高い音がします。良質の瓦が生産された時代です。

また瓦制作の過程でできる痕跡や仕上げによって大まかな時代を知ることができます。古代からみられる**縄叩き痕**（縄を巻き付けた棒で土を叩きしめた痕）や**布目痕**（型に土が張り付くのを防ぐため麻袋をかぶせた痕）、**糸切痕**（粘土の塊から糸を使って切り出した痕）は、やがて**叩き文**（模様を刻んだ木の板で叩きしめた痕）、**ゴザ状圧痕**（木型にゴザをかぶせた痕）、**鉄線痕**（鉄線で切り出した痕）と変化していきます。中世の丸瓦では**吊り紐痕**（木型にかぶせる麻袋が瓦の生型から取り外ししやすいようつけた紐の痕）のたれ具合で時期を知ることができ、**刻印**や**柄叩き痕**（道具の柄の部分で内側を叩いた痕）など製作者を示す痕跡が見つかることもあります。

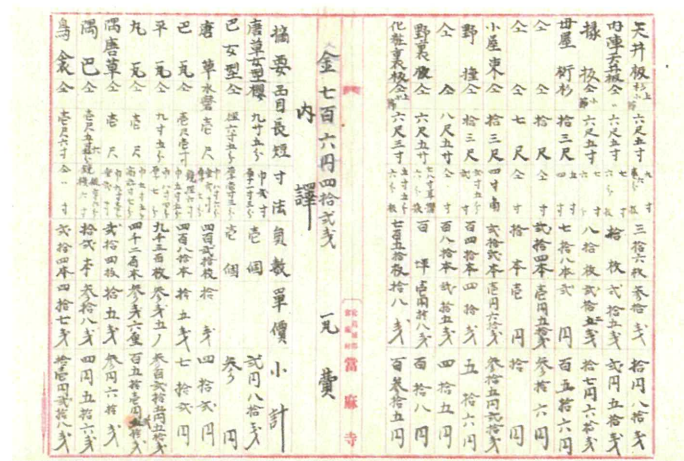
より良い修理を行うためにはできる限り建物の事を知る必要があります。木部や瓦をはじめとする建築部材や建物の構造・意匠などの建築的調査はもちろん、所有者に伝わる古文書や過去の修理記録などの歴史資料、建物の内外を荘厳する美術工芸、建築材料の種類や産地を分析する自然科学の分野まで幅広く調査する必要があります。

今回の西塔の保存修理事業においても、多角的に調査をおこない、修理履歴と各時代の修理目的と内容を明らかにすることで、建物に最適な修理工事をおこなっています。

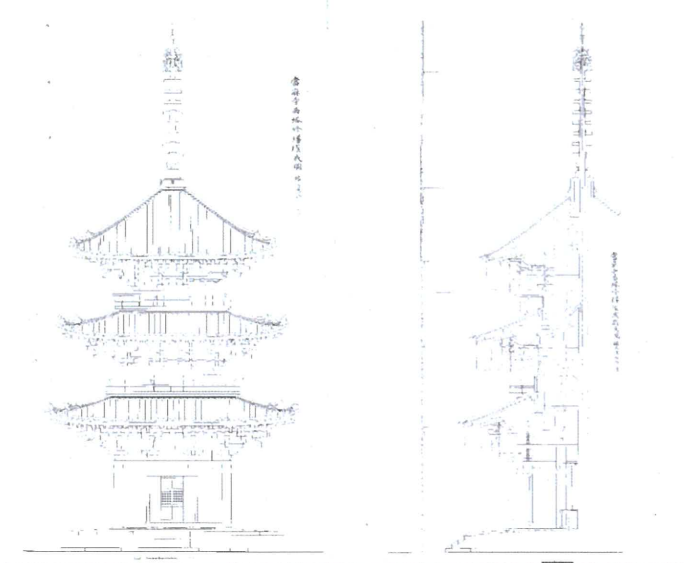
瓦に残る痕跡



国宝 当麻寺西塔保存修理事業
- 瓦編 -



「当麻寺西塔修繕工事精算書」(抜粋、大正5年)



「当麻寺西塔修繕竣成圖」



国宝当麻寺西塔 瓦員数表

	初重	二重	三重	計
丸瓦	1,229	1,088	1,266	3,583
平瓦	3,305	2,761	3,386	9,452
軒丸瓦	176	156	144	476
軒平瓦	172	152	140	464
鬼瓦	8	8	8	24
熨斗瓦	735	747	828	2,310
他	24	24	24	72
計	5,649	4,936	5,796	16,381



軒丸瓦実測調査



三重北西隅一の棟鬼瓦 (3D スキャンデータ)

●屋根と瓦

西塔の屋根は丸瓦と平瓦を交互に葺く本瓦葺で、軒先は軒丸瓦、軒平瓦という前面に板状の飾り(瓦当)のついた瓦が使われています。また分水嶺にあたる隅棟には鬼瓦、熨斗瓦など特殊な形の瓦が使われています。

●西塔の瓦

西塔には約 16,000 枚の瓦が使われていましたが、大半は大正修理時のものに取り替えられていました。古い瓦は主に三重南面に集められており、軒平瓦は平安と室町、軒丸瓦は室町、平瓦は江戸と大正、丸瓦は大正のものが葺かれていました。また境内にある他の建物(本堂、金堂、講堂、東塔)の瓦も使われていました。初重の高欄下には江戸以前の丸瓦が保管されており、大正時代の修理における古材を大切にする姿勢も垣間見ることができます。

●瓦の調査

屋根瓦解体後、瓦は種類ごとに分けられ調査が行われます。寸法、痕跡、仕上げ、重さや材質、またどう取り付けられていたかなど詳細に観察し、写真や図面で記録をしていきます。

今回新たな試みとして、3D スキャナーによる記録も進めています。複雑な形状を素早く正確に計測することが可能で、瓦当文様の違いや、肉眼では確認しづらい仕上げの様子や痕跡などもはっきり見ることができ、より詳しく観察できるようになりました。また瓦を屋根に戻した後も、瓦当文様の比較や仕上げ・痕跡の再調査が可能になることも大きな利点です。将来的には 3D スキャンデータを公開し、研究に活用されることで新たな知見が得られるかもしれません。



軒丸瓦 (3D スキャンデータ)



三重北西隅一の棟鬼瓦 (鎌倉)

三重北東一の棟鬼瓦 (鎌倉)

三重南西隅一の棟鬼瓦 (鎌倉)

三重南東隅一の棟鬼瓦 (鎌倉)

鬼瓦



三重南面軒丸瓦 (室町)

三重南面軒丸瓦 (室町)

三重北面軒丸瓦 (江戸)

軒丸瓦

三重南面軒丸瓦 (康永 4 年 (室町) 本堂修理瓦)

二重北面軒丸瓦 (大正 3 年)

初重南面軒丸瓦 (明治 36 年東塔修理瓦)



三重西面軒平瓦 (康永頃 (室町))

三重南面軒平瓦 (平安)

初重東面軒平瓦 (大正 3 年)

軒平瓦

初重東面軒平瓦 (明治 36 年東塔修理瓦)

三重南面軒平瓦 (平安)